

嗜癖行動のケース研究

佐藤 嘉晃

1. はじめに

有機溶剤乱用は、昭和40年代初頭から青少年の間に広がりはじめたものである。

有機溶剤乱用で警察に補導される少年の数は、昭和58年をピークに減少傾向にあるが依然として少年の間には広まっている。

表1-1 シンナー等乱用少年の男女別推移

区 分	57年	58年	59年	60年	61年	62年
総 数	49,638	51,383	46,636	43,713	38,542	40,472
構成比	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
男 子	42,157	42,028	37,510	34,794	29,884	29,965
構成比	84.9	81.8	80.4	79.6	77.5	74.0
女 子	7,481	9,335	9,126	8,919	8,658	10,507
構成比	15.1	18.2	19.6	20.4	22.5	26.0

●少年非行の概要等 警察庁保安部少年課 1988 青年期までの発達心理学より

現在も少年の間には根強く広まっており、無職少年よりも、学生、生徒の方が補導される割合が高くなっている。

表1-2 シンナー等の乱用及び覚せい剤事犯で補導した
犯罪少年の学職別状況（平成3年）

区 分	学職別 総 数 (人)	学 生, 生 徒				有職少年	無職少年
		計	中学生	高校生	その他		
シンナー等の乱用	20,125	6,524	2,675	3,265	584	7,824	5,777
うち 女子	6,930	2,774	1,210	1,301	263	1,551	2,605
女子の割合(%) 総数に占める	34.4	42.5	45.2	39.8	45.0	19.8	45.1
覚せい剤事犯	943	75	15	40	20	296	572
うち 女子	524	54	12	27	15	126	344
総数に占める 女子の割合(%)	55.6	72.0	80.0	67.5	75.0	42.6	60.1

警察白書（平成4年）警察庁

2. 事 例

有機溶剤乱用の少年の輪郭をつかむために、筆者が東京都の児童相談所の児童福祉司として扱ったケースのうち、2ケースをとりあげて分析し、その心理、社会的要因を明らかにしようと思う。

なお、事例記載にあたっては当事者のプライバシーを守るために、本文の趣旨に直接関係のないところは一部修正するとともにすべて仮名とした。

〈事例1〉A君 17才

会社員の父の第一子（下に弟がいる）として出生。父はアル中傾向が顕著で、飲酒しないともいえない小心な人である。

そのために、母や弟からも軽くあしらわれており相談相手にされない。母はパート勤めをしている。父の言によれば、非常に気丈な人である。父の小心な性格傾向には不満があるが、どうにもならない諦めの状態で、一家は母中心に切り盛りされている。

A君はおとなしい性格である。この傾向は幼少時からあり、めったに親に反抗しない子であった。成績は小学校、中学校を通して中位から下位のレベルである。運動はあまり得意ではなく、どちらかといえば目立たぬ存在感のうすい子であった。

中学卒業時から様子が変わってきた。目ざす高校受験に失敗した。そして最後の望みの綱であ

った自宅より少し遠いところにある高校の受験にも失敗した。

父は、「高校へも行けないのか」と本人に面と向って罵倒した。それ以来、父への信頼がもてなくなり憎悪するようになり口をきかなくなったという。

そして進学をあきらめ、建設会社に就職することになった。

中学を卒業する間近に、友人より誘われてシンナーを吸うようになっていた。

高校に入学できなかったという挫折感や進学した他の友人から後れをとってしまったという劣等感から、だんだんひねくれてしまったという。

時には仕事にも行かず、家の中に閉じこもりシンナーを吸引し、家で無為に過ごすことが多くなった。

建設会社の社長（親方）は話のわかる人で休みがちなA君を何とか一人前の社会人にしようと努力してくれ、会社は首にならずに何とか勤めている。

〈事例2〉B君 14才

会社経営の父の第2子（上に姉がいる）として出生。父は会社経営に心血を注いでいる。

いわゆる会社人間のような人である。家では、神経質、小心、過敏で、家族と雑談することはほとんどない。

母は会社員（正規社員）である。几張面、勝ち気で、我が強いが、子どもの教育には熱心で、家庭の主導権を握っている。

B君は、父は何もいわないので物足りないといい、母のことは、口うるさく、こまかいことまで注意されるので嫌いと言っている。

姉とはほとんど口をきかないという。

B君はもともと無口でおとなしく、誘われると断れない性格である。

学校の成績は、小学校から普通以上で、スポーツが得意である。特に野球では、ピッチャーとしてすぐれた成績を残している。

小学校6年の時に同級生や上級生のグループより誘われ、シンナーを吸引した。

以後中学に入学してからもたびたび仲間と一緒に、学校近くの雑木林の中などで吸っている。

両親は学校からの通報ではじめて、シンナー吸引の事実を知った。

その頃より、不良交友が盛んとなり、時には外泊をしたりした。また、ビリヤード店にひんばんに出入りし、金遣いが荒くなり生活が乱れはじめた。

3. 有機溶剤乱用の動機

はじめて吸うきっかけは、事例1、2ともに友人や先輩に誘われてというケースであり、これは一般的にいわれている傾向と一致している。何回か乱用するようになってからも、仲間と一緒に

にいて何となく吸ってしまうというものの割合が高いといわれている。

これは、仲間と有機溶剤を吸うという仲間意識のあらわれであり、集団同一性の強化につながっているといえる。

もちろん有機溶剤乱用それ自体が目的であることはいうまでもない。

また、事例1, 2とも本人はおとなしく無口であり、GSホールのいう「疾風怒涛」時代の戸惑いと不安の多いこの時期をのりこえるには弱い面をもっており、嫌なことがあった時にそこから逃れるために吸っている場合もあり、まさに逃避的な心理機制としての乱用もある。

4. 有機溶剤乱用による症状

杉本研士（米倉育男, 1979, p59より引用）はシンナー吸引時の症状の推移について典型的な経過として、次のように分けている。

第1期 導入期（粘膜刺激、嘔気、脱抑制、無痛など）

第2期 不安緊張期（不安緊張状態を背景とし、幻視を中心とする不快な異常体験）

第3期 多幸・多動期（快い異常体験への変化）

第4期 不関・鈍麻期（異常体験の消褪、外面的には恍惚、不関、無為）

第5期 身体症状発見期（自律神経失調症状が主）

A君, B君の症状をあてはめてみると, A君の場合は, 第4期の不関, 鈍麻期を経験している。はじめのうちは, 雨戸を閉め切った部屋で吸っていると, もれてくる光がナイフにみえ, なおみつづけていると, そのナイフが自分の方にとんでくるという幻覚症状を経て, 不関のなり, ぼうとした恍惚とした気分を経験している。

B君の場合は, 第3期の多幸, 多動期を経験している。

すなわち, 酒を飲んで酔っぱらったようなボーツとした感じがして, 何もわからない酩酊感を伴い, 多幸感や発揚感を経験している。

5. 家庭環境

筆者の経験によれば, 家庭環境の調査の結果, 両親は健在で, 経済的には比較的余裕のある家庭が多かった。

a 父親 優柔不断, 小心, 無関心, 多忙, 傍観者, これが多くの有機溶剤乱用の少年がもつ父親のイメージである。

父親ないし父親性を自ら放棄してしまっている。青年期は母親にかわって父親の役割が, 浮き彫りにされてくる。

男子は特に父親の言動を取り入れ、同一化することにより)自己同一性を形成し自立していく。

すなわち、父親の自信に満ちた生き様を見習うようになる。父と対決し乗り越えることによって、生きることの尊さ、意欲的な生き方、人生における価値感などを体得していく。

この時期に、父親が家族の中で浮き上がってしまうということは、本来はたすべき役割をもととしないことであり、子どもにとって、これほど不幸なことはない。

b 母親 有機溶剤乱用の少年の母親には勝ち気な女性が多い。

子どもの教育、しつけなどは、母親が行っており、父親は家庭の中心としての存在感は全くといってよい位なく、父親の権威が失墜している。

このような母親中心の家庭では、母親が家の支配権を握っている。

その結果、子育ての場合過保護、過干渉になりやすい。

6. ま と め

竹山恒寿(米倉育男, 1979, p49より引用)は、シンナー吸引の動機を以下のように述べている。

薬物乱用を成因から、治療的施用, 神経症的施用, 非社会的施用, 依存的施用などに分けている。

シンナー吸引者の場合、主として、非社会的、好奇的施用がその動機となっている。

すなわち、仲間から半強制的に誘惑されたとか、友達が使用しているのをまねたとかである。

この場合、交友関係が重要な引きがねとなっている。

そのほか、不安や現実からの逃避といった神経症的動機もみられる。

以上から、有機溶剤を乱用する青少年は、強い不適応感を抱いていたり、仲間との交流の必要性、現実からの逃避から有機溶剤乱用にのめりこんでいくケースが多いことがうかがわれる。

そのため、有機溶剤乱用の害ばかり説いて乱用をやめさせようとしても、それだけでは困難がともなう。

適応感もてるような環境づくりと本人に対する積極的な働きかけが必要となろう。

〈引用文献〉

- 1) 水口禮治・竹内照宗編 1989 青年期までの発達心理学 プレーン出版
- 2) 米倉育男 1979 シンナー嗜癮の精神病理 大原健士郎編集 現代のエスプリ別冊(思春期の心理と精神病理) 至文堂

〈参考文献〉

- 1) 齊藤 学 1984 嗜癡行動と家族 有斐閣選書
- 2) 齊藤 学 1989 家族依存症 誠信書房